

- (20) 網干善教「鎌子塚古墳」(『御所市史』、1965年)
- (21) 菅谷文則「新庄屋敷山古墳」(1975年、奈良県教育委員会)
- (22) 土生口純之「埴口丘陵外堤邊岸工事区域の調査」(『書陵部紀要』第32号、1980年)
- (23) 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一「大和二塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、1962年)
- (24) 藤田和尊「埴甲編年とその意義」(『関西大学考古学研究紀要』4、1984年)
- (25) 伊藤勇輔「寺口埴山古墳群発掘調査概報」(『奈良県道跡調査概報1979年度』、1980年)  
伊藤勇輔「寺口和山古墳群第2次発掘調査概報」(『奈良県道跡調査概報1980年度』、1981年)
- (26) 伊藤勇輔(前出註25文献)
- (27) 関川尚功・生田維道・松田貞一「新庄火野谷山古墳群」(『奈良県文化財調査報告書』第31集、1979年)
- (28) 泉森校「当麻町史 考古篇」(1984年)
- (29) 坪井良平「大和国笛吹社の古墳」(『考古学雑誌』第3巻第7号、1921年)
- (30) 泉森校・菅谷文則「大和葛城の笛吹・山古墳群の分布」(『古代学研究』第60号、1971年)
- (31) 白石太一郎・河上邦彦「葛城・石光山古墳群」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年)
- (32) 近藤義郎・今井亮「群集墳の盛行」(『古代の日本』第4巻 中国・四国、1960年)
- (33) 藤田和尊「武器・武具の集中管理と芦屋・西宮地域の群集墳」(『芦の芽』36、1984年)
- (34) 田中一広「日勢山古墳群調査概要 Ⅱ」(『御所市文化財調査概要58 Ⅰ』、1984年)
- (35) 網干善教「御所市小殿古墳」(『奈良県文化財調査報告』第3集、1960年)
- (36) 田中一広「日勢山古墳群(クケノケ支群)発掘調査概報」(1984年)
- (37) 千賀久・田中一広「日勢山古墳群(ミノヤ支群)発掘調査概要Ⅰ」(『奈良県道跡調査概報1982年度』1983年)
- (38) 久野邦雄(前出註9文献)



図5 室・中西道跡採集土師器



図6 石川古墳群(16-B-61)採集須恵器杯身

## 第2章 調査の契機と経過

### 1 調査の契機

巨勢山丘陵の地質は、傾家複合岩類の葛城石英閃緑岩を主とする基盤層より成り、その風化した砂礫土は昭和40年代以降、格好の山土として土砂採取の対象となった。

そのために多くの古墳が未調査のままに破壊され、現在はようやく土砂採取は停止しているものの、比高数10mの崖上に墳丘断面を露呈し、崩壊寸前となっているものが少なからず存在する。

御所市教育委員会では、このような古墳を主たる対象として昭和58年度から国庫および県費の補助を受け、巨勢山古墳群の発掘調査を実施しており、今回の調査は第2年次のそれに相当する。

第1年次（昭和58年度）は、奈良県立橿原考古学研究所への委託業務であり、大字条の条池南古墳、条池北古墳を調査対象とした。特に条池南古墳では横穴式石室内に二上山白石製の石枕付剣袈裟式冢形石棺を検出。金銅装馬具の他、多量の須恵器等も出土し、調査例の決して多くはない巨勢山古墳群にあって、貴重な資料を提供した。

今年度調査対象とした大字室字サカイ谷所在の巨勢山境谷10号墳は、墳丘西半を土砂採取により完全に破壊され、比高差50mを超える崖面上に、かろうじて東半部分を留める状態であった。

なお今回の調査を行うにあたっては、土地所有者、杉村太一氏より全面的な協力を得ることができた。記して感謝したい。

### 2 調査の経過

調査は、8月7日、崖下の簡易基準点より墳頂へ絶対高を上げることから開始し、10日には墳丘北トレンチを掘削し始めた。同トレンチにより観察できた墳丘盛土内からは弥生土器片が相当量出土し、古墳の調査と共にその性格を解明することも課題として付加されることとなった。

そのために、墳頂部平坦面のうち、北半部については、盛土を地山まで掘削し、遺構等の検出に努めたが、弥生時代のそれについては明確にすることは出来ず、墳丘形成時の地山整形を検出するに留まった。なお、弥生土器片は、墳丘東トレンチの周溝内埋土からもかなりの量が出土した。

古墳の調査は、8月10日より墳丘部分を中心とした平板測量から開始し、9月12日には墳丘北・墳丘東・墳丘南の各トレンチにおいて墳丘端を面する溝（周溝）の存在を確認した。

8月17日には墳頂部平坦面の東南部分において、小形横穴式石室の存在を確認、精査に移った。石室が小規模に過ぎるため調査に相当な困難を伴うことが予想できたので、天井石を構築したままでの石室内精査を断念し、天井石は凶化の後、9月5日には除去、石室内堆積土の廃土にかかった。

同日中には一部床面を検出。同10日には精査を終了した。元来、持ち送りの著しい石室であった上に、天井石を除去したため、奥・側壁材がバランスを失い次々に崩落し、調査終了時には5石を杭により石室内から支えてやらねばならない有様であった。9月17日には石室埋戻し。その後断続的に埋戻し作業を実施し、10月16日、石室周辺部にワラ芝を張り付け、全ての作業を終了した。

### 3 調査日誌抄

- 8月7日 国道309号線上にある簡易基準点T.P. 113.1mより標高を上げる。中途。
- 8月8日 前日に引き続き、墳堀へ絶対高をひく。墳堀の絶対高=T.P.173.839m。墳堀と崖下との比高差=36.057m。
- 8月9日 草刈り。トラバース組み。
- 8月10日 慰霊祭。墳丘測量を開始し、墳頂部測量は終了する。墳丘北トレンチを設定。同トレンチ墳丘盛土内より券生土器片、約20点出土。
- 8月11日 墳頂部に十字アゼ設定。北側より表土を剥ぎ始める。埴輪片出土。
- 8月13日 墳丘北トレンチで、墳丘を画する溝を確認。分層の後、土層断面実測。墳頂の表土を排除する過程で、墳頂平坦面西南にて石材とともに須恵器杯身片出土。
- 8月14日 平板測量は、墳丘部分ほぼ終了。直径24mの円墳かと思われる。
- 8月17日 墳頂は表土下第1層まで掘削。墳頂の東南隅から人頭大の花崗岩2個を検出。これは、後に石室天井石の一部とわかる。墳丘北トレンチ土層断面実測図終了。
- 8月18日 墳丘東トレンチ掘削。ほぼ終了したが、拡張部では墳丘を画する溝の上半しか検出できず、下半はさらに下にあることがわかる。券生土器片の出土量は多い。墳丘南トレンチでは、墳頂近くに深い溝を検出(1m位か?)。墳頂部の地山は平坦面を形成しているかと思われる。
- 8月20日 墳丘東トレンチを拡張し、溝を検出。墳頂部にて、小形横穴式石室の天井部分と思われる石材を検出。
- 8月23日 墳丘東及び南トレンチ写真撮影。墳頂土層図終了。
- 8月24日 小形横穴式石室の掘方の一部を検出。墳丘南トレンチを北に向かって拡張するが、盛土はほとんどない。
- 8月25日 墳丘南トレンチ再拡張。墳丘東トレンチ土層断面実測図は、中途で終わる。午後から雷雨の為作業中止。
- 8月27日 墳頂トレンチを地山まで掘り下げる。墳丘盛土以前の地山整形を明瞭に看取できる。
- 8月28日 墳頂トレンチの地山整形及び墳丘東トレンチ溝部分の堆積状況の写真撮影。午後から雨の為作業中止。
- 8月29日 墳頂主体部基坑検出。
- 8月30日 墳頂主体部天井部実測終了。平板による遺構測量終了。
- 9月31日 平板による尾根部測量。
- 9月3日 平板測量、北の一部を残して終了。
- 9月4日 平板測量終了。
- 9月5日 主体部西半部縦断を掘り下げる。天井石を除去。内部には土が充填。石室西南コーナーの石材落下。床面を検出した。
- 9月6日 石室内埋土の実測図より、石室内の土は、水平堆積に近い状態であることがわかる。
- 9月7日 基坑掘方の屑を全て検出。石室南側は、石材抜き取りの為乱れており、その範囲を検出。午後から雨の為作業中止。
- 9月10日 墳頂主体部精査。東南側は、石の抜き取りの為、基坑屑を削り取られており、検出不可能。墓道の埋没状況調査の為、主体部主軸に直交するあぜを設定する。
- 9月11日 墳丘東トレンチ埋めもどし。墓道検出の為、墳丘南トレンチをさらに拡張。
- 9月12日 墳丘南トレンチ掘削。石室割り付けを終え実測開始。墳頂トレンチ掘削再開。
- 9月13日 航空写真撮影。
- 9月14日 石室実測。墓道検出。先端に性格不明のビットあり。
- 9月15日 石室実測。午後から雨の為作業中止。
- 9月16日 石室実測。墳頂トレンチ掘削。
- 9月17日 石室実測全て終了。石室のみ埋めもどし完了。
- 10月11日 埋めもどし。
- 10月12日 埋めもどし。芝張りのみ残し終了。器材を撤収。
- 10月16日 石室周辺にワラ芝を敷く。調査終了。

## 第3章 遺構と遺物

### 1 墳丘外形 (図7)

西側の半分以上を、土砂採取により破壊されているため、断言はできないのであるが残存部から推定すると、本墳は若干東西方向に長い偏円形の円墳で、南北24m、東西は復原状態で約30mを測ると思われる。また、墳丘高は北側約6m、東側約7m、南側約3mである。

墳頂部は平坦であるが、西側中央部に浅い凹みが見られ、後述する様に今回の発掘で検出された主体部が、副次的なものと考えられるため、中心主体への盗掘口であるとも考えられよう。

次節において詳述するように墳丘の北側、東側、及び南側の各トレンチにおいて幅約3mから1.5m、深さ約0.3mから1.0mの周溝が、それぞれ検出されている。そして測量図においても検出された周溝に対応する、コンターライン間隔の変換部を看取することが出来る。まず北トレンチと東トレンチの間については、174.0mと175.0mのコンターラインにはさまれた部分の傾斜が、周囲よりも緩く北トレンチ、及び東トレンチで検出された周溝とも対応する。東トレンチと南トレンチの間については174.0mから179.0mのコンターラインの間で、各所に西北方向へのコンターの入り込みを観察でき、このことから周溝は残存部の全周にわたって巡っているものと考えられる。また、これも後述するが、北トレンチ及び東トレンチで2段の落ちが検出されている。南トレンチと東トレンチの間の176.25mから178.00mのコンターラインが、落ちが巡ると考えられる線に沿って傾斜が急になっており、落ちは全周を巡るものと思われる、コンターラインに表われないものの、2段目も全周に渡って回っていると考えるのが適切であろう。

### 2 各トレンチの所見

#### 墳丘北トレンチ (図8)

墳丘北側に、墳丘端の確認を意図して設定した幅1m、長さ6mのトレンチである。

墳丘盛土は明黄褐色砂質土(8)～黄褐色砂質土(16)であり、墳丘の外側から内側へと積まれている状況を看取できる。

a地点においては地山を段状に整形した後、暗黄褐色砂礫土(15)以上の盛土を行っており、その地山整形にあわせた段が明黄褐色砂質土(8)、暗茶褐色砂質土(10)、灰褐色砂質土(12)により形成されていたものと思われる。

この段は、後述する墳丘東トレンチにおいても存在を確認しており、いわゆる段築にしては平坦部が狭きに過ぎるものの、明らかにそれを意識したものであろうと考えている。

b地点は墳丘端であり、c地点の周溝へと続いている。なお、当トレンチでは墳丘盛土(8～16層)および周溝埋土(19・20・21層)内から相当量の弥生土器片が出土した。

- |            |            |
|------------|------------|
| 1 表土       | 12 灰褐色砂質土  |
| 2 暗褐色土     | 13 暗褐色砂質土  |
| 3 暗黄褐色砂質土  | 14 褐色砂質土   |
| 4 暗褐色砂質土   | 15 暗黄褐色砂礫土 |
| 5 暗褐色砂質土   | 16 黄褐色砂質土  |
| 6 黄褐色砂質土   | 17 明褐色砂質土  |
| 7 黄灰褐色砂質土  | 18 褐色砂礫土   |
| 8 明黄褐色砂質土  | 19 淡黄褐色砂質土 |
| 9 暗褐色砂質土   | 20 茶褐色砂質土  |
| 10 暗茶褐色砂質土 | 21 褐色礫砂土   |
| 11 暗黄褐色砂質土 |            |

※8~18は填丘盛土

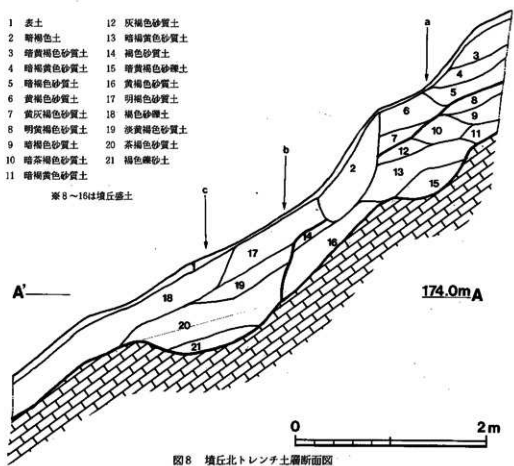


図8 填丘北トレンチ土層断面図

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 黒褐色砂質土  | 7 灰黄褐色砂質土  |
| 2 淡茶褐色砂質土 | 8 暗茶褐色砂礫土  |
| 3 淡茶褐色砂質土 | 9 暗灰褐色砂質土  |
| 4 茶褐色砂礫土  | 10 茶褐色砂礫土  |
| 5 茶褐色砂礫土  | 11 暗赤褐色礫砂土 |
| 6 黄褐色砂質土  | ※2~6は填丘盛土  |

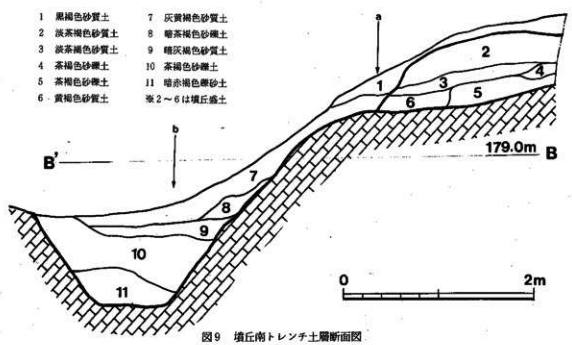


図9 填丘南トレンチ土層断面図

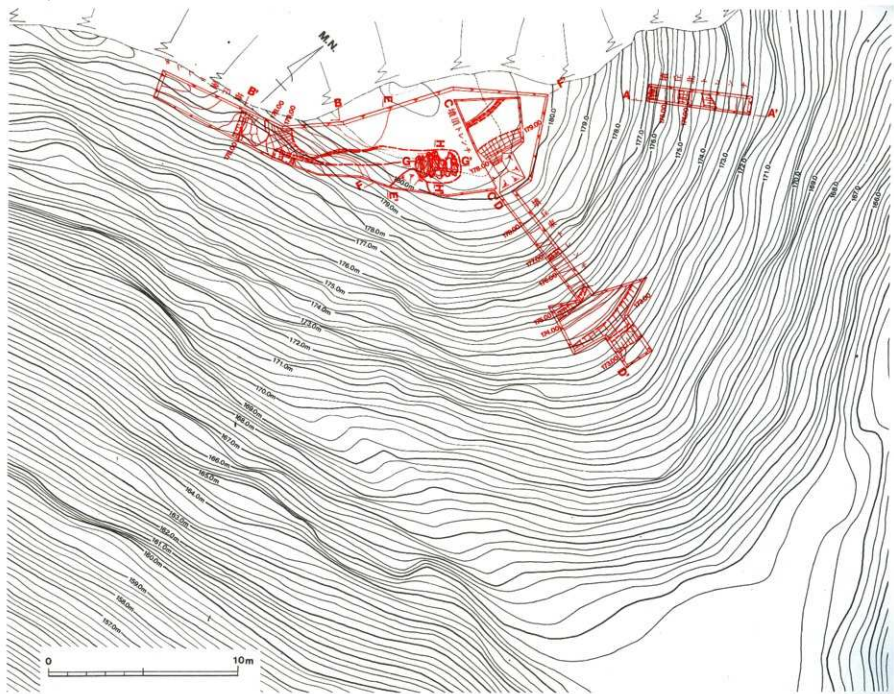
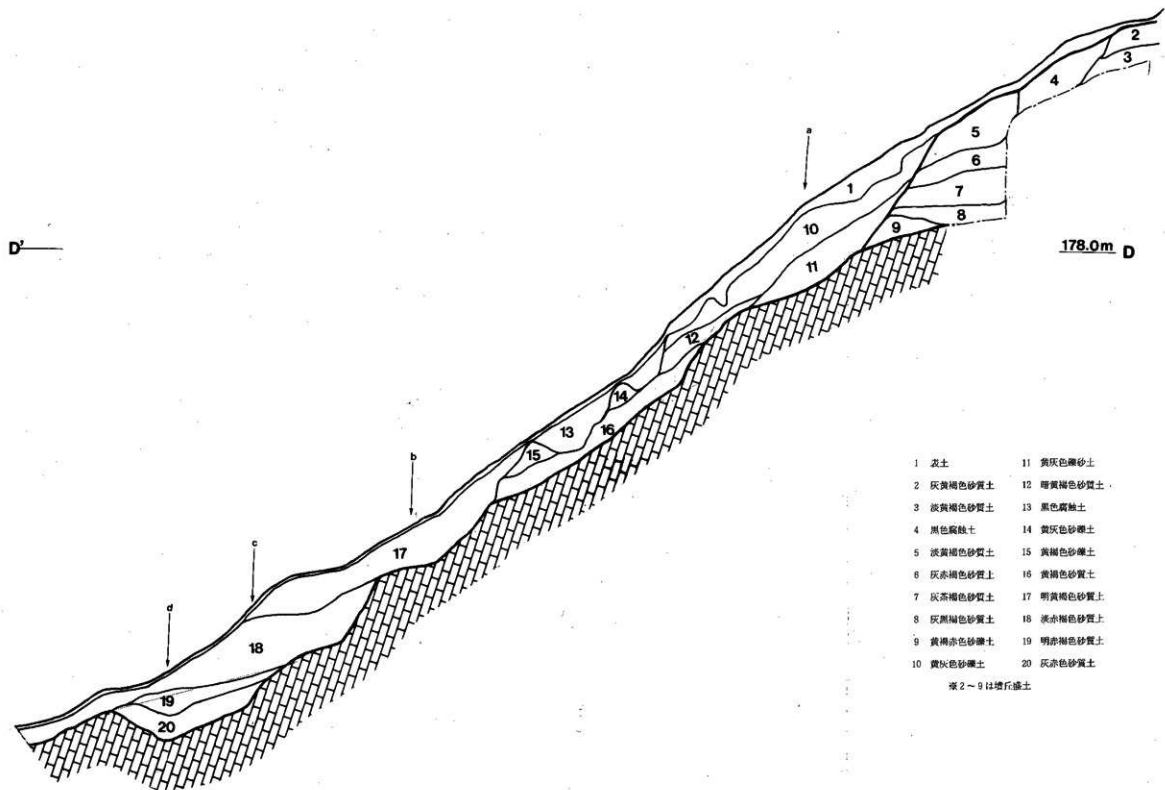


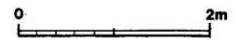
图7 巨势山地谷10号填丘测量图 (S, = 1 : 200)



- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 表土      | 11 黄灰色礫砂土  |
| 2 灰黄褐色砂質土 | 12 暗黄褐色砂質土 |
| 3 淡黄褐色砂質土 | 13 黑色腐植土   |
| 4 黑色腐植土   | 14 黄灰色砂礫土  |
| 5 淡黄褐色砂質土 | 15 黄褐色砂礫土  |
| 6 灰赤褐色砂質土 | 16 黄褐色砂質土  |
| 7 灰赤褐色砂質土 | 17 明黄褐色砂質土 |
| 8 灰黄褐色砂質土 | 18 淡赤褐色砂質土 |
| 9 黄褐色砂礫土  | 19 明赤褐色砂質土 |
| 10 黄灰色砂礫土 | 20 灰赤色砂質土  |

※ 2~9 は増成土

図10 増成東トレンチ土層断面図



### 墳丘東トレンチ (図10)

墳丘東側に、墳丘端の確認を意図して設定した幅1m、長さ11mのトレンチである。ただし、墳丘端および周溝部分においては若干の拡張を行なっている。

墳丘盛土は灰黄褐色砂質土(2)～黄褐色砂礫土(9)である。墳頂付近のみを盛土とし、他は地山の削り出しにより墳丘としている。

さきに北トレンチで見られたのと同様の段状の地山整形は当トレンチにおいても認められ、a・b両地点においてテラス様のものを形成している。ただし北トレンチの段は下方のb地点のそれに対応するものである。

これらは明らかに段築を意識したものであり、墳丘の北・東側については三段築成の感を呈するものであったと思われる。

c地点は墳丘端、d地点は周溝である。なお、当トレンチにおいても周溝埋土(19・20層)および墳丘流出土(18層)内から相当量の弥生土器片が出土した。

### 墳丘南トレンチ (図9・11)

墳丘南側に、墳丘端および横穴式石室に通じる墓道の確認を意図して設定した幅1.5m、長さ約10mのトレンチである。

墳丘盛土は淡茶褐色砂質土(2)～黄褐色砂質土(6)で墳頂付近のみを盛土としている。

さきに北・東トレンチで見た様な段築状の遺構は、南側が尾根側に相当し、標高が高いためか存在せず、墳丘端(a)は、深い周溝(b)へと直接続いている。

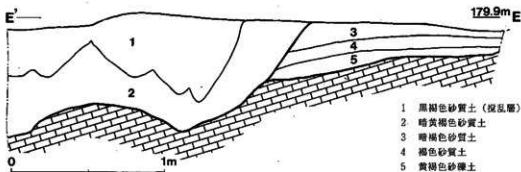


図11 墓道堆積状況



当トレンチの北側延長線上に小形横穴式石室があり、同方向への墓道が通じている。

墓道は石室の墓塚と同時に掘り込まれており、図11に見る通り墳丘盛土（3～5層）から掘削されている。さらに墓道は南へと至り、周溝を渡ることになるが、その直前には小さな平坦部分とピットがあり、加えて周溝内には1m前後の自然石が落と込まれている。

あるいはここに、墓道から周溝を渡る橋の様なものの存在を想定することも可能かも知れない。

#### 墳頂トレンチ（図12）

墳頂部北半に別の埋葬施設の有無を確認することを主たる目的として設定した任意大のトレンチである。

埋葬施設については何ら新たな知見を得ることはできなかったが、段状の地山整形の存在を確認した。ただし、その意味については、ついに明らかにすることはできなかった。

あるいは、西側に在ったと考えているもう一つの埋葬施設に伴う遺構で、当時の墳頂平坦面の端が、この段に相当するのかも知れない。

当然のことながら、全てが盛土であり、墳丘の外側から内側へと積まれている状況を看取できる。

なお、当トレンチにおいては、暗灰色砂質土（8）、黄褐色砂質土（9）以上の盛土内では円筒埴輪片、灰褐色砂質土（15）内ではサヌカイト石核、土製丸玉の出土をみている。

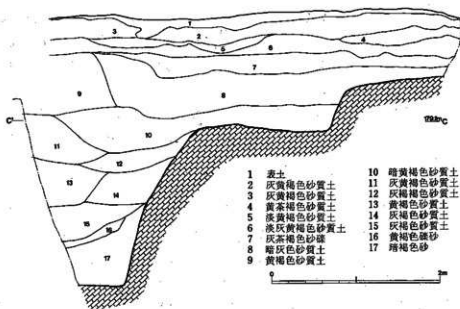


図12 墳頂トレンチ土層断面図

## 石 室

### 構築および堆積 (図14、図15)

墓壇は、必ずしも地山から掘り込まれているわけではないが、その底は全面が地山となっている。さらに基底石の形状にあわせて、それを整形している部分もあり、石材の安定を図っている。

石室床面は、地山直上に淡灰褐色の比較的柔らかい砂質土(6)を全面に敷くことより成り、開口部においては、その上に閉塞石を内に含んだ、暗黄褐色砂質土(5)が置かれている。

閉塞石・石は図16にもある様にその右側が攪乱を受けており、盜掘口はこの部分であろう。その後の石室内の堆積は水平堆積を原則とするもので早い段階での盜掘以降は全くさわられていない。

暗灰色砂質土(4)、暗黄灰色砂礫土(3)は、開口部から一気に流れ込んだ状況を呈している。

(2)の暗灰色礫砂土、(1)の暗灰色砂礫土は、(3)(4)層堆積の後、石室材の間隙から徐々に侵入してきた土であり、図12、図13の暗灰色砂質土(8)に近似したものである。

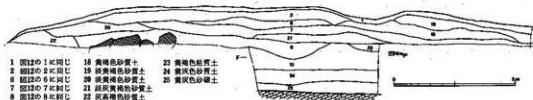


図13 墳丘断面土層図 (但し検出面は横穴式石室の天井石まで)

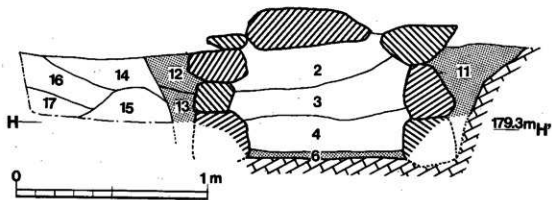
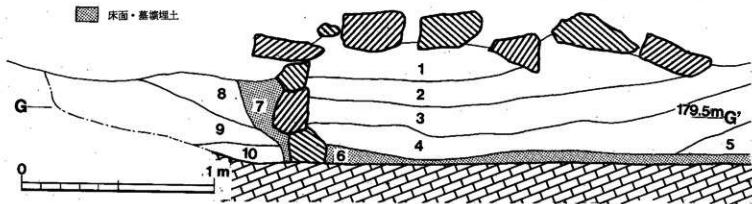
### 石 組 (図16)

今回の調査で検出された埋葬施設は葛城石英閃緑岩を使用した小形、無袖の横穴式石室である。以下、石室の左右は、全て奥壁から開口部に向かって見た場合のそれとする。右側壁の一部の石材が抜き取られている他は、良好に遺存していた。本石室は墳頂部平坦面の南西隅にあり、後述するように開口部から南に墓道がのびている。

石室規模は内法で、石室全長2.2m、奥壁幅0.73m、玄室中央部幅0.86m、開口部幅0.7m。また、奥壁高0.5m、玄室中央部高0.6m、開口部高0.4mであり、石室の主軸は、N-41°15'50"-Eと大きく西にふつている。これは墓道を尾根上に設置するためとられたものと考えることができよう。

石室の平面プランには若干、胴張りが観察できる。これは左側壁において、その傾向が著しい。

奥壁は基本的には4段に石を積んだものである。第1段(基底石)は30×30cmほどの比較的大きさのそろった、若干丸みを帯びた石材を3個使用している。第2段も3石使用しているが、右側の石が他に比して大きく3段目にまで及んでいる。第3段は2個の石材から形成され、左側の石材が中央のものに比べてかなり横幅がある。また、第3段も第2段と同じく石材を小口積みになっている。第4段では他の段より大形の石材を使用しており、特に他の段では見られなかった持ち送りを行なっている。それは特に左右コーナーの石材に顕著で、三角持ち送り状を呈している。なお、目地は縦



上 图14 石室内堆積土縱断面

下 图15 石室内堆積土横断面

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1 暗灰色砂礫土  | 10 明褐色砂礫土  |
| 2 暗灰色礫砂土  | 11 暗黃灰色砂礫土 |
| 3 暗黃灰色砂礫土 | 12 暗灰色礫砂土  |
| 4 暗灰色砂質土  | 13 暗灰色砂礫土  |
| 5 暗黃褐色砂質土 | 14 灰褐色砂質土  |
| 6 淡灰褐色砂質土 | 15 明黃褐色砂礫土 |
| 7 黃褐色砂質土  | 16 明灰褐色砂質土 |
| 8 暗黃褐色砂質土 | 17 淡黃褐色礫砂土 |
| 9 暗灰色砂質土  |            |